

者の混同がおびたしい。

ただし、不苦庵の出自等について解明する必要がある。

(平成三年一月例会)



紹

介



アレクサンダー・コーン著、酒井シヅ・三浦雅弘訳

『科学の異』

自然科学者や医学者ほど地位や名譽にこだわり、功名心の強い人間はいないとよくいわれる。本来なら真理を追求することが唯一の目的であるべきなのに、実際はそうではないことへの非難として持ち出される文句である。

確かに、その非難には一理があり、私の周りを見てもそれに該当するような例を見ることが少なくなく、どろどろした医学研究者社会の状況に辟易することも再三である。

しかし逆にいって、真実だけを知るために研究し、功名心などは念頭にないという学者が存在するのであろうか。もちろんそのような純粋な学者がいなければいけないが、いたとしてもおそろくごく少数派に属するにちがいない(しかしここでは臨床の医者のごく少数派に属するにちがいない)。なんとすれば、地位や世間の意味での力がないとたとえ国の予算であれ獲得できないという研究費の現状ひとつとっても、真理、真実を求めることだけが研

究者の道といった夢のような話はないからである。かつてのよき時代はともかく、それが現代という時代の最大の特徴である。

むしろ、露骨に言えば、研究者の大方は、地位や名譽の獲得や功名心を大きなモティーフとして、真理、真実への追求に全力をそそぎ、地位や名譽が得られればさらに真理、真実への道を拡大していくというべきなのかもしれない。

研究という科学者の行動には、主体が個人であれ、グループであれ、ある種の密室性がある。ある実験を行い、その結果を公表するとする。その目的、方法、対象に問題がなく正当であるとすれば、その数値、あるいは文章の表現として出された結果については、研究者の発表のままに信用するのが建前である。研究者の権威が高ければ高いほどその信用性も高い。いずれその実験に対しては追試がなされ、その正否について論じられることになるが、発表時においてはただそれを信用する以外はない。つまり、研究者の間には、われわれは実験にはすべて正直で、得られたありのままのデータを報告しているという暗黙の前提がある。K・S・ノリスによれば「科学とは科学者が相互に嘘をつかないようにするルールの集合である」というわけである。

ところが、地位や名譽にこだわり、研究費の獲得に精を出し、業績の先陣争いをするあまり、自らの実験データや観測記録をごまかすという事態が生じてくる。追試などによっていずれは判明するはずであり、いずれはごまかした研究者は科学や医学の世界から追放されていくことになるが、ただ被害はそのような個人の

問題だけにとどまらず、それまでの数年間はその間違ったデータによって多くの研究者が惑わされることになる。そのような例はこれまでに数多く報道されている。とくに、日本では少ないが（もちろん少ないということはそのようなことが存在していないということを意味しない。要するに表面化しただけのことであろう）、欧米では露頭すれば、調査委員会がつくられ、詳しい報告書が提出されることになる。

本書では、そのような科学や医学の研究でみられるさまざまな不正行為、つまり、単純な「不注意」や「過失」や「誤り」から故意の「でっちあげ」、「データ操作」、「捏造」、「詐欺」に至るまでの種々の不正行為について、詳細な事例をもとに、論じられている。有名なニュートンやメンデルの話から、自殺したカンメラ、ノーベル賞をもらったカレルの不死の細胞のこと、著名な心理学者のバート、かの悪名高いルイセンコ、皮膚移植で不正を働いたサマーリン、贗物であるビルトダウン人の話など、およそ五〇例以上の実例についての紹介である。とりわけ、実際にはやっていない実験の捏造や実験データの勝手な変更や操作、自分の仮説に相対しないデータの破棄などの実例の報告が多く取り上げられており、科学者の正直さを信じて疑わない科学や医学の素人にとっては、まさに慄然とするような内容となっている。こんな事例を次から次へと読まされると、一体科学者や医学者なんか信用できるのかと思いたくなる位である。それでもおそらく、これは氷山の一角であろう。

著者は、テルアビブ大学のウイルス学の名誉教授であり、医学

の専門家であるが、また科学史家としてもよく知られている。それだけに、本書の内容は事例に則って実に正確で、きわめて学問的でもある。また、酒井、三浦による翻訳がよくできており、読みやすく、「事実は小説より奇なり」で、表現は悪いが大変に面白く、時間を忘れて読み耽ってしまう。

しかし、われわれ科学や医学にたずさわっている者は、面白がってばかりいてはならないだろう。ひょっとしたら、これはわれわれ自身の未来の話なのかもしれないのである。日常のいろいろな場面で、いつもわれわれを待ち構えている『罨』は魅惑的であり、つい不正行為の誘惑にのってしまいうそうである。そんなときに、この書を思い出すことにしよう。

（松下 正明）

〔工作舎 一九九〇年 A五判 三六三頁 定価三、二〇〇円〕

中西啓著

『シーボルト前後、長崎医学史ノート』

付録「三瀬諸淵『麦酒醸造説』

先般ボンペ、顕彰記念医学講演会が、東京、大阪、長崎で開催され、興味深く、医学の原点を学んだ。

現代日本医学教育記念の地にある長崎大学医学部は『長崎医学百年史』の編纂を昭和三十年から開始したとある。本書の著者、中西啓先生は当時医学部三年生で編集執筆に参画、爾来先生の研究は人一倍熱心で、本業後の睡眠時間を少なくしてまで続けられ